

ユダヤ人とは誰か？

ジェイコブ・プラッシュ

今日教会の中でユダヤ人の本当のアイデンティティーについての議論があります。誰がイスラエルの十二部族の血を引いた子孫なのか、また教会はどこに位置するのか、神は異邦人教会のためにイスラエルを永遠に諦めたのか、また現代イスラエルの世俗の市民たちは神の選民なのかなど。これらはクリスチャンの間でイスラエルについて話す時に頻繁に登場する質問です。

まずはじめに、異邦人の時について語っているふたつの聖書箇所を見ることから始めてみましょう。ひとつはローマ 11 章 25 節で、そこでパウロは救いという観点から語っています。「異邦人の完成のなる時」。イエスはルカ 21 章 24 節で異邦人の時を、国家の預言的側面から語っています。「異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされません」

ユダヤ人への神の目的は部分的また一時的に保留されました。しかし個人的にイエスを信じるユダヤ人はいつの時代でも存在しました。それはただ一日にして終わったのではありません。神は「もう終わりだ—私は異邦人に行く」とは言いませんでした。異邦人の時は使徒 10 章でコルネリオの家で最初に異邦人が信じたときに始まります。その後、使徒 13 章でパウロやバルナバの働きがあります。

異邦人への移行は漸進的な（少しずつ進む）ものでした。一日の間にユダヤ人から異邦人へ恵みが移ったのではなく、そこには移行期があったのです。そしてそれと同じように異邦人の時は終わりに至ります。これは神がご自身の恵みを異邦人からユダヤ人に戻される移行期のことです。

イザヤはメシアが千年王国に到来することを預言しました。初代教会はすべて前千年王国説を信じていました。そして新約聖書は神が恵みをイスラエルに対して回復される時にキリストは再臨すると書いています。神がユダヤ人を頑なににしたことは部分的であり、一時的です。なので神はあたかもこう言っているようです。「私はあなたがたを呼んだが、あなたがたは私の契約を破った。私はエレミヤを遣わしたがあなたがたは牢獄に入れた。イザヤを遣わしたがあなたがたは半分に切り裂いた。私はリバイバルをもたらす義の説教者たちを遣わした。ヨシヤ王を遣わし、ヒゼキヤ王を遣わした。またエズラやネヘミヤを遣

わしたが、あなたがたはそのようなりバイバルを忘れてしまった。あなたがたは私の契約を破り、今度は私の息子、メシアを退けた。私は異邦人のほうに行く」

しかしパウロはその状況が入れ替わる時が来ると私たちに語っています。したがってそこには異邦人とユダヤ人という区別があるのです。それではユダヤ人とは一体誰のことなのでしょう？

創世記 12 章にはアブラハムへの 5 つの約束があります。またパウロはローマ 2 章 29 節で本当のユダヤ人がどのようなものかを説明しています。パウロはそこで言葉遊びを用いて書きました。

『かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです』

誉れという言葉が鍵となる言葉です。“ユダヤ人”という言葉はユダ部族——イエフダから来ています。その本来の意味は“神の礼拝者（誉れを与える者）”というものです。パウロはここで言葉遊びをしています。パウロは誉れが人から来るものではないと言っているのです。それは“ユダヤ人”の意味——ユダ部族からの神の礼拝者とかけた言葉遊びです。

“ユダヤ人”と再定義される異邦人

私たちが今日“ユダヤ人”と呼ぶものの一般的な定義は主にバビロン捕囚から生じたものです。本来、彼らはイスラエル人と呼ばれていました。“ユダヤ人”という言葉がユダヤ人自身からではなく、異邦人によりアブラハム、イサク、ヤコブのすべての子孫へ付けられたことは興味深いことです。これは福音書でも顕著な事柄です。マルコ 15 章 32 節ではイエスはユダヤ人から“イスラエルの王”と呼ばれています。しかし同じ章の 2 節では彼はローマ人たちから“ユダヤ人の王”と呼ばれています。イエスはユダヤ人にとっては“イスラエル人”だったのです。“ユダヤ人”という一般的な言葉は主にバビロン捕囚の期間またその後主に発達したものです。第二列王記 16 章を見ると、南王国ユダに住んでいた住民の地理的な位置を知ることができます。当時の“ユダヤ人”はただ、バビロン捕囚から戻ってきたユダの住民を指す言葉でした。本来彼らは“イスラエル人”と呼ばれていて、それはヘブル人から来ていました。“イスラエル人”はヤコブ、神と闘う者の子孫であり、それがユダヤ人の特徴を形作っています。ユダヤ人は神と闘う者です。ヤコブは主の御使いと格闘しました。ラビたちはその御使いを“メタトロン”と呼んでいます。私たちはそれがキリストの顕現——旧約聖書でのキリストの顕れであることを知っています。

ここで思い出してほしいのが、ヤコブは主の御使いと顔が見えるまで夜を通して格闘したということです。夜とは大患難に関して最も一般的に用いられる聖書象徴の比喻のひとつです。「夜回りよ。今は夜の何時か。夜回りよ。今は夜の何時か」彼が戻って来るのは第二の夜回りか、第三の夜回りか。「夜中の盗人のように来る」「わざを、昼の間に行なわなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます」ヤコブは夜の終わりまで格闘しました。未信のイスラエルは大患難全体を経験し、その後、大患難の終わりにイエスを認めます。聖書中でヤコブという言い方がなされているとき、それはユダヤ民族に特化した表現です。ユダヤ民族は神と格闘しています。一方彼らが国になる前、出エジプトから彼らは“ヘブル人”と呼ばれていました。

新約聖書はこれをさらに展開しています。新約聖書ではユダヤ人とは南部イスラエル人の子孫、つまり、バビロン捕囚から帰還したユダヤの民、またマカベア家の後のハスモン王朝を通ってきた者たちのことです。ですがヨハネはそれに特別な見解を加えています。彼は他の福音書と違った独特な意味で“ユダヤ人”という用語を使っています。そのために誤ってヨハネの福音書がクリスチャンの反ユダヤ主義を伝えているといわれていますが、私たちは当時の背景を理解する必要があります。ギリシア語の“ユーダイオス (*Ioudaios*)”の翻訳に問題があるのです。ヨハネは、ヨハネ 4 章を除いて、“ユダヤ人”という単語を、エルサレム内外に住みサンヘドリンが支配していた宗教組織のメンバーという意味で使っていました。したがって「ユダヤ人のために」や「信じたユダヤ人は」という表現を見る時、彼らはみなユダヤ人であったことは確かなのです。それが意味していることは、その宗教組織の一員であった者のこと、たいていがパリサイ人、時に他の分派のこともありました。しかしそのすべての者がサンヘドリンの支配下にあったのです。使徒の働きはより一般的な用語を使うか、“ユダヤ人”という単語をより一般的な意味で使っています。それは異邦人ではない者、ガアル（在留異国人）ではないもの、サマリヤ人ではない者という意味です。

ユダヤ教

ユダヤ教には主要な三種類があります。モーセ的ユダヤ教、タルムード的ユダヤ教、イスラエルの法的ユダヤ教です。このうちふたつは有効で、ひとつはそうではありません。最初のモーセ的ユダヤ教はタナク、旧約聖書の最初の五書、モーセ五書に見られるものです。このユダヤ教は紀元 70 年から存在しえないユダヤ教です。預言者ダニエルはメシアは大事神殿が崩壊する前に来て、死ななければならないと言いました。ミシュナのサンヘドリン 96b にもそうあります。実際、人々はイザヤ 53 章を禁断の章と呼んでいます。タルムードは事実ダニエル 9 章を読む者には呪いが下ると書いています。なぜでしょうか。それはその箇所にもメシアの到来の時期が予告されていたからです。メシアはやって来て、死なな

ればなりません。ユダヤ人の多くは尋ねます。「もしイエスがメシアなら、なぜ今も戦争があるのか」彼らはきちんと理解していません。ダニエルにはメシアが来て死に、終わりまで戦いが続いて、荒廃が定められていると書いてあります。メシアはその第二の到来において世界的な平和をもたらすのです。

ユダヤ教ではふたつのメシア像があります。マシアハ・ベン・ヨセフ、それとマシアハ・ベン・ダヴィード、つまりヨセフの子とダビデの子です。最初の到来においてイエスはヨセフの特徴をもってやって来ました。それはユダヤ人兄弟たちに裏切られ、異邦人の手に引き渡されるという特徴です。彼の兄弟はヨセフを最初の出会いで認識しませんでした。2度目に会った時に彼だと分かりました。そして彼らはヨセフと共に激しく泣き、それと同じことをヨセフの子にも行うのです。第二の到来においてダビデの子はメシアの王国を建て上げます。そうです、イエスは平和をもたらします。ですが最初の到来は救いをもたらすために来られました。モーセ的ユダヤ教に関しては、それは紀元70年以降は存在していません。

誰も自分で聖書を読むだけでは、人々が信じさせようとしているものと同じ結論に至る人はいません。本当に多くの人々がただ新約聖書を読むだけで新生に至っています。誰もただ新約聖書を読んだだけでエホバの証人になることはありません。誰もただ新約聖書を読んだだけでモルモン教徒にならないし、（私の母親にこう言ったと言わないでほしいですが）誰もただ新約聖書を読んだだけでローマ・カトリック教徒にはなりはしません。そしてユダヤ人の誰もトーラーを呼んで、タルムード的ユダヤ教がモーセや預言者のユダヤ教だと思う人はいないのです。“ラビ”という単語はタナク（旧約聖書）に一度も登場しません。

二つ目のユダヤ教がタルムード的ユダヤ教です。それは紀元90年のヤブネの会議にてラビ・モーシェ・ヨハナン・ベン・ザッカイが創設したものです。彼はガマリエルの学派出身の聖パウロと同級生でした。彼はラビ・ヒレルの孫ガマリエルの元に、ヒレルのパリサイ派神学校で他のラビたちと学んでいました。これはふたりのラビの物語です。ふたりの同級生がいました。タルソのラビ・サウルとラビ・ベン・ザッカイです。紀元70年に神殿が崩壊した時、ラビ・ヨハナン・ベン・ザッカイはエルサレムから箱、棺桶に入れられなんとか脱出しました。そしてヘブライ語の正典——旧約聖書が定められた会議に集ったのです。彼は神殿の代わりにシナゴグにしようと言いました。大祭司の代わりにラビたちを置き換えました。そしていけにえの代わりにより多くのミツヴォート——善行を行おうと決めたのです。

すべてのユダヤ人はこのふたりの同級生どちらかに従います。救いの確信が無かったヨハナン・ベン・ザッカイか、イエシュアを自分のメシアと信じていたために救いの確信があ

ったタルソのラビ・サウロのどちらかです。

タルムード的ユダヤ教はモーセや預言者のユダヤ教ではありません。それは混ざり合ったのもので—まさに名ばかりのキリスト教と同じです。タルムード的ユダヤ教にはさまざまな形があり—ハシド派、正統派、保守派とあります。またリベラルな改革派は基本的に人間主義者です。その宗教は本当の信仰に関するよりも文化や倫理的なことにかりあっています。これがタルムード的ユダヤ教です。ですが三種類目のユダヤ教があります。これは有効なものです。これがパウロや使徒たちが守ったものです。それはイエスがトローラーを成就したメシアだと信じるユダヤ教、「メシアニック的ユダヤ教」です。しかしながら今日のメシアニック運動の中にはさまざまなものがあります。

ユダヤ人が何でないかという地位の定義について考えてみましょう。パウロはローマ人への手紙 2 章 28 節–29 節でこう書いています。「外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです」文字ではなく霊によります。

さて人目に隠れたユダヤ人についてですが、このふたつの節の誤解によって置換神学の考えに推進力が与えられています。「我々が人目に隠れたユダヤ人なのだ。私たちの心は割礼を受けている」というものです。しかしながら、もし誰かが手紙を受け取ったなら、手紙全体の文脈を無視して、ある部分だけを引用することはできません。ローマ人への手紙は手紙であり、そのような解釈は手紙のその先に書いてあるものと正反対のものです。11 章全体では、この手紙の著者であるパウロが聖霊（ルアハ・ハ・コデシュ）の導きのもと、本来のオリーブの枝（ユダヤ人）と接木された枝（異邦人）の区別を付けています。

エレミヤ 31 章 31 節ではこのようにあります。「わたしは、イスラエルの家とユダの家に、新しい契約を結ぶ。その契約は...（父祖たちと結んだもの）のようではない」神は新契約を誰と結んだのでしょうか？教会でしょうか？イエスは教会とひとつも契約を結びませんでした。彼はイスラエルとユダヤ人に結ばれたのです。もし神がユダヤ人との関係を終わらせたのなら、神は教会とも関係を終わらせたことでしょう。もし神がユダヤ人との関係を終わらせたのなら、私たちとの関係も終わっていました。幸運なことに、契約の有効性は人の忠実さによるものではなく、神の忠実さによるものです。神は初めからご自分の民が不忠実であることを知っておられました。イスラエルの背信に関することでも、それと同等またはイスラエル以上の背信が実際に教会の中にあります。

信じた非ユダヤ人、すなわち異邦人が信じないユダヤ人にとって代わったのは事実です。

自分の木から切り折られた不信のユダヤ人が信じた異邦人にとって代えられました。しかしそれは**新しい木ではなく、同じ木**なのです。根は見るできません。しかしもし根が死んでいたなら、木そのものも死んでいるのです。もし神がイスラエルとの関係を終わらせているなら、自動的に教会との関係も終わらせていることになります。

北王国の失われた十部族についてはどうでしょうか。聖書は彼らに何が起こったかを記しています。北王国からの忠実な者たちはアサ王の治世に南に下り、自分たちの部族としてのアイデンティティーを守りました。そのためにヤコブの手紙は“十二部族”に向けて書かれています。ルカの福音書の誕生物語に登場するアンナは、アシェル部族の出身でした。ミシュナはずっと3世紀、4世紀までそれぞれの部族の記録をたくさん残しています。十部族は聖書によれば決して失われていないのです。他の者たちはアッシリア人侵略者たちと雑婚し、サマリヤ人となりました。そしてその他はアッシリア帝国に散らばり、中央アジアのユダヤ人共同体を形作ったり、ただ吸収されてしまいました。

ローマ人への手紙 2 章 28 節から 29 節を見てみましょう。「かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です」エレミヤ 9 章 25 節から 26 節は“割礼を受けているが割礼を受けていない者”という言葉を使っています。そのような者たちに対して「エジプト、ユダ、エドム、アモン人、モアブ、および荒野の住人でこめかみを刈り上げているすべての者を罰する」と書かれてあります。ユダが異邦人の国々のただ中に書かれていることに注目してください。これはなぜなのでしょう。それは異教徒のようにふるまうなら、ユダヤ人は彼らに勝ったところが無くなるからです。そのような人はユダヤの遺産を捨て去ってしまっています。自分たちのメシアを退けたユダヤ人は自分たちのユダヤの遺産を放棄してしまっています。パウロが言うように彼らはもう一度自分たちの木に戻されることができます。神はユダヤ人をとても簡単に信じさせることができます。なぜなら神はそれより困難なことをもうすでにされたからです。それはエスキモーにユダヤの神を信じさせ、ベネズエラ人にユダヤの神を信じさせ、中国の民に信じさせ、ヨーロッパ人にユダヤの神を信じさせたからです。イザヤ 11 章 1 節にある、異邦人がエッサイの根のもとに来るという言葉が諸国の上に成就するなら、また軽蔑されたこの小さな国の神を非ユダヤ人に信じさせられるのなら、自分たちのメシアをユダヤ人に信じさせることはいかに容易なことでしょうか。

割礼は改宗のひとつの象徴です。それでは非ユダヤ人で新生した者はどうなるのでしょうか？ 私たちはその答えをイザヤ 56 章 3 節とエペソ 2 章 12 節で見ることができます。「主に連なる外国人は言うてはならない。『主はきっと、私をその民から切り離される』と」（イザヤ 56 章 3 節）神はあなたがユダヤ人のメシアに信仰を持つなら、ユダヤ人から切り離しはしません。アブラハムがすべて信じる者の父と書かれていることを思い出してください。

それはアブラハムが異邦人からユダヤ人へ改宗した者であるからです。アブラハムは民族的にユダヤ人であり、同時に異邦人でした。このためにアブラハムはすべて信じる者の父なのです。このためにイエスの系図の中に異邦人が登場します。彼がすべての救い主となるためです。パウロはエペソ 2 章 12 節においてギリシア語で政治的な市民権に関する言葉を使っています。

『そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については外国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです』(エペソ 2 章 12 節-13 節)

異邦人はイエスへの信仰を通して接ぎ木されました。それは養子にされることと、父祖へなされた約束のためです。養子をする時、父親は法律的に子どもの父親になります。母親は法律的に母親となるのです。そしてこれと共に聖書では、父祖の約束にあずかることも書かれてあります。大半が異邦人で占められていたコリントの教会に対して第一コリントでパウロは「私たちの父祖たちはみな、雲の下におり、みな海を通って行きました」と書いています。アブラハムの子孫(種)を信じる信仰によって、アブラハムは人種に関わらずすべて者の父となりました。

第二に、改宗—信仰の転換によってです。改宗(回心)にもふたつ種類があります。仏教徒が救われるとき、仏教徒であることをやめます。ヒンドゥー教徒が救われれば、ヒンドゥー教徒であることをやめます。ユダヤ人が救われれば、その改宗には違った言葉—テシュバー(立ち返ること)が使われます。その人は罪から神に立ち返り、ユダヤ人としてのアイデンティティーが完全となるのです。異邦人のみが改宗できます。ユダヤ人は完成されるのです。ユダヤ人の完成はテシュバーです。これは異教徒の背景を持つ黒人アフリカ人の子どもがクリスチャンのポーランド人家庭に養子されることで説明できます。その子は法律的な養子制度によりポーランド人となり、キリスト教に改宗しました。しかしその子が今度は大きくなり、ポーランド人の女性と結婚するとします。そうすると彼は結婚によりポーランド人となり、ポーランド語を話し始めます。したがって彼は文化によりポーランド人になったのですが、彼の肌は黒いままで。これが非ユダヤ人がイエスの信者となる場合に起こることです。父祖の約束を受けることによりユダヤ人ではありませんが子となります。それは養子—改宗、宗教的な改宗によるものです。または婚姻関係により子となります。それはキリストが主に異邦人である教会の花婿であるからです。第一コリント 9 章では、異邦人が主の聖餐にあずかる場合の文化変容について書いてあります。彼らは本来の相続者とペサハ、過越の祭りの意義を祝います。これが異邦人クリスチャン

の地位です。

貧しさのためにヨーロッパの家族に養子されたこのアフリカ人の子どもを考えてみてください。いかなる法律的、婚姻的または文化的理由においても彼はポーランド人となりました。しかし彼はまだ黒人アフリカ人であるのです。彼はまだ自分のアイデンティティーを保っています。それでも彼は本当のポーランド人なのです。彼は他のどの子どもとも同じように親から愛されています。子どもをひとり生むことと、子どもを養子することは同じくらいの大きな愛を必要とします。その子どもは同じ法的権利を持ち、法的地位を保っているのです。

次にユダヤ人に関しては法的な立場があります。最初のもはイスラエルの帰還法です。シオニズム運動の父祖たちはこれを議論しました——数年間ではなく、数十年間にわたってです。最終的にベン・グリオンが言いました。「誰がユダヤ人なのか、我々の敵に決めさせよう」彼らはその通りにしました。ユダヤ人の祖父をひとりでも持っていれば強制収容所に行くとナチスが言ったために、イスラエル政府もユダヤ人の祖父がひとりいればアリアー（帰還）を行い、イスラエルに移住する権利があると決めました。これが本来の帰還法です。

第二にハラハー的な（ユダヤ法的）法律があります。これはユダヤ人の宗教法で立てられたものです。ハラハーによるとそれは母系の血筋によるものです。ある人の母親がユダヤ人で、その人がユダヤ教へのハラハー的な改宗を経ているなら——言い換えるなら割礼ですが——父祖の約束に入ることができるというのです。第三のものは、イスラエルのラビが定めるユダヤ人の定義で、それは本体ハラハーの定めるものと同じであるべきものです。ですが現実にはイスラエル政権の窮状によって物事は複雑化しています。世界には約 55 の民主主義の国がありますが、その中で唯一ユダヤ人が宗教の自由を持ってない国があります。それがイスラエルです。これはイスラエルのラビが定めるユダヤ人の地位です。彼らは数世紀前にラビ・ヨセフ・カロ（*Yosef Karo*）が定めたミツヴォートの法典『シュルハン・アルーフ（*Shulchan Aruch*）』を受け入れなければならないと言います。そしてもし『シュルハン・アルーフ』を受入れないならば正式にユダヤ人となれないのです。このためにアフリカ系ユダヤ人（ファラシエ）の中で葛藤が起こり、インド系ユダヤ人（イェフディン）また正統派でないユダヤ人の間でも葛藤が起こります。反シオニズム主義のラビは何の問題もなくラビでいられますが、改革派やリベラルのラビたちは資格を持ってないのです。私たちはこれまで人々がどのようにユダヤ人の宗教の自由を奪ってきたかを話してきました。ユダヤ人の歴史的な惨劇や侮辱を私は認めます。しかしイスラエルもユダヤ人の宗教の自由を否定し、特にメシアニックジューに対して同じことを行っているのです。

これによりイスラエルの法的立場が考えられます。数年前に彼らは、他の信仰にかつて改宗したことのある人はユダヤ人ではないと決めました。特にミクベー・ブリット (*mikve-brit*)、洗礼を受けた場合です。その当時であってもそれは政治的圧力の強い決定でした。法的な立場におけるユダヤ人の定義をこれまで 4 つ見てきましたが、それを見るとそこに共通認識が無いことが分かります。そこには法的共通認識も、宗教的共通認識も無いのです。彼らは政治の便宜に合わせてユダヤ人のアイデンティティーの定義を気まぐれに定めているのです。

聖書的な分類

聖書はどう語っているのでしょうか。旧約聖書、タナクにあるのは主に父方の系図ですが、歴代誌には母方の系図もあり、ルツ記の記述もあります。これは非常に重要です。正統派のラビたちは系図に基づいてイエスのメシア性の信用を落とし、新約聖書の正当性を攻撃します。しかし彼らが言いたがらないことは、ラビ的な文書自体 (サンヘドリン 25C) がルカの系図はマリヤのものだと言っていることです。「いや、ユダヤ人のアイデンティティーは父からでなくてはならないのだ」との反論が返ってくるがありますが、ラビたち自身がユダヤ人は母方の系図によると言っているではありませんか。ラビたちは自分たちの中で矛盾を起こしています。一方で、歴代誌とルツ記には母方の系図の前例となるものがあるのです。

新約聖書はより寛大です。系図は母方であり、父方でもあります。パウロはテモテに割礼を受けさせました。思い出してほしいのが、割礼は本来モーセの律法の一部ではなかったということです。それはその以前にアブラハムに与えられました。割礼、ブリットミラー (*brit-mila*) はシナイ山での律法の授与に先立っていたのです。

もし神が救いを伝える者として偉大な国を望んでいたなら、また神がみことばとご自身の救いを偉大な国に与えようとされたなら、バビロンを選ばれたでしょう。アッシリアであったかもしれません。もし頭が賢い人たちなら、古代ギリシア人を選んだことでしょう。もし商業に長けた人たちを選ばれていたなら、フェニキヤ人を選んだことでしょう。ダビデやソロモンの時代にイスラエルはその栄華を極めていましたが、それでも超大国ではありませんでした。そして千年王国のキリストの支配まで超大国となることは決してないでしょう。神はなぜ偉大な国を選ばず小さな国を選ばれたのでしょうか？これと同じ理由で神は私たちを選ばれました。なぜ貧しい人のほうが富んだ人よりも救われやすいのでしょうか？なぜ教養がある人よりも教養が無い人のほうが救われやすいのでしょうか。それは誰をも誇らせないためです。高慢の下地が無い分、“自分を見てください”ということも少ないのです。それは私たちが偉大な恵みを受けるには不相応で、値しないことを知るためな

のです。このために神は私を選ばれました。

選びの性質を誤解しないでください。それは地位に関してのものではありません。それは奉仕に関するものです。第二に特権は義務と共にやって来ます。祝福はいつも“相方”を持っています。ローマ1章16節には「福音は、...信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です」とあります。ユダヤ人に最初に伝えられたことは事実です。それと同じで福音を退けた結果も最初に来るのです。神の宣託が彼らに属しています。新約聖書はそう語っています。最初に彼らに対して救いが提供されていたので、その救いを退ける結果も最初に来るのです。なぜ異端審問があったのでしょうか。なぜホロコースト、ポグロム、反ユダヤ主義があったのでしょうか。なぜ自分たちの地においてもユダヤ人には平和が無いのでしょうか。レビ記26章や申命記28章を読んでください。そしてどれにもまして申命記18章18節を読んでください。「彼らのためにあなたのようなひとりの預言者を起こそう...彼（メシア）が告げるわたしのことばに聞き従わない者があれば、わたしが彼に責任を問う」（申命記18章18節-19節）とあります。まずユダヤ人に対して救いが提供されていたことは事実です。しかしそれを退けたことの結果も最初に来るのです。

信じた異邦人が接木されました。そして信じないユダヤ人が自分の木から切り落とされました。なんという悲劇でしょう！

カトリック教徒と改革派プロテスタントは、割礼に等しいものとしてどちらも幼児洗礼を授けます。割礼は国家的な契約でした——今でいえば教会国家です。人々は単にユダヤ人の家庭に生まれ、割礼を受けているだけで神と正しい関係にあると思っていました。これはかつての目的とは正反対のもので——新しい契約は父祖たちと結んだような契約ではないのです。

移行期

メシアが来ると新しい契約はそのようなものではなくなるとエレミヤは語りました。バプテスマのヨハネが来たとき、彼はユダヤ的なミドラッシュを用いて神はアブラハムの子孫を石からでも起こすことができると言いました。イエシュアがシュロの主日に神殿の石を指して言ったことを覚えているでしょうか？もしあなたがたが私を受け入れなければ石が叫び出すと。ユダヤ的な比喻を通してイエスが言われていたのは、もしイエスを受け入れずメシアと宣言しないならば異邦人——石が叫び出すということです。第一ペテロには私たちが神殿の石だとあります。

ですが、歴史の中で信者たちが終わりの時代と考えていた時と、今この時はどのように違

うのでしょうか？中東情勢が世界の注目の的になったのは今が最初ではありません。私は今中東で起っていることが預言的な重要性を持っていることを確信しています。ですが、これが最初ではありません。

結局のところ、プリマス・ブラザレンはナポレオンが反キリストだと考えていました。その時と現代とはどう違うのでしょうか。イングランドの信者たちはムッソリーニが反キリストだと考えていました。彼らもナポレオンが反キリストだと考えていました。彼は中東を侵略し、ローマ帝国の再編を試みました。彼は自分の頭に冠を置き、自分を皇帝としました。人々は彼が反キリストだと思ったのです。第一世紀にメシアニックジューたちはその時が終わりの時代だと考え、イエスのいとこのシメオンの下、エルサレムから脱出しました。彼らはそれが携挙に至ると思っていました。ベスビオ火山が噴火した時（ポンペイが灰に埋もれ）、火山灰が大気圏に広がりました。それで太陽と月は光を放たなくなりました。神殿は破壊され、人々はネロが反キリストだと思いました。ローマ皇帝は経済的支配を得るために人口を数えました。信者たちはそれが終わりだと思っていました。それではなぜこの時代がそれと違うのでしょうか？クリスチャンが終わりの時代と考えた時代は主要なもので7つあり、あまり知られていないものでも12回あります。

真実の新生したクリスチャンたちが、これは終わりの時代と考えた時と今はどのように違うのでしょうか。かつては欠けていて、今存在する事柄は何でしょうか？イスラエル国籍を持った私の息子エリは百年前なら救われていなかったでしょう。私の友人ケブは5百年前なら救われていなかったでしょう。兄弟ラリーは1千年前なら救われていなかったでしょう。兄弟デビッドは1千5百年前なら救われていなかったのです。ですが彼らは今救われています。

異邦人の時が完成に至ります。15年前、アメリカのラビの大学は、この18世紀よりもこの18年間のほうが、より多くのユダヤ人がイエスをメシアとして信じたという論文を出しました。これは15年前のことです。私たちはシナゴグ全体がイエスのメシア性によって勝ち取られる時代に来ているのです。私の友達のラビ——正統派のラビ——でも救われ信じた人がいます。

神はその異邦人の時が始まったときにどう言われていたのでしょうか。「ああ、イスラエル。私はあなたに向かってずっと手を差し伸べてきた。あなたが契約を守るように、メシアに備えるように願ったがあなたは反抗した。私はエレミヤを遣わしたが彼を牢獄に入れた。私はイザヤを遣わしたが彼を半分に切り裂いた。私は次から次へと預言者を遣わしたが玄関と祭壇の間で石打にしてしまった。私は使者を遣わした。イスラエルに義を宣べ伝える説教者を遣わしたがあなたは彼らを退けた。私はリバイバルをもたらす者たちを遣わした。

ヒゼキヤやヨシヤ、エズラやネヘミヤだ。しかしそのようなりバイバルをあなたは忘れてしまった。そして何ということだ私の息子まで退けてしまった。もう私は異邦人のほうへ行こう」

しかし今異邦人の時は終わりに近づいています。「私は異邦人の教会に呼び掛けた。英語圏の国々、プロテスタント系民主主義国、私はアメリカやイギリスに呼び掛けた。私は契約をあなたがたに与えた。私はジョン・バニヤンを遣わしたがあなたがたは彼を牢獄に入れた。私はウィリアム・ティンデルを遣わしたが、あなたがたは彼を焼き殺した。私はヤン・フスを遣わしたが彼も焼き殺してしまった。私はアメリカにりバイバルをもたらした義の説教者たちを遣わした。私はジョナサン・エドワーズを遣わし、D・L・ムーディーを遣わし、ビリー・サンデーを遣わした。あなたはそのようなりバイバルを忘れてしまった。アメリカよ。あなたは私の息子を退けた。私は出来ることをすべて行った。今、私は昔からの私の民、イスラエルに恵みを引き戻そう」

私はこのようなことがこれから起こるようになるかと語っているのでしょうか。そうではありません。私はイエスの御霊によって言います—それは**今現在**起きていることなのです。神が異邦人に恵みを向けられる前、第二世紀にユダヤ人の第二の大きな収穫がありました。世俗のユダヤ人歴史家であったマックス・ディモント (*Max Dimont*) できえも、紀元 120 年前後のバル・コクバの乱の起こる前にエルサレムの **25** パーセントのユダヤ人がイエスを信じていたと書きました。私たちが神に対して信じることも同じです。神がユダヤ人に恵みを戻される前に私が切に願っていることがあります。それはもう一度アメリカとイギリスに悔い改める機会を与えてくださることです。イスラエルは恵みに相応しくなく、私たちも相応しくありません。しかし神は恵みをユダヤ人に向けています。異邦人の時が終わりに近づいています。その時はもう一度来はしません。今がその時なのです。